

ありさあやがイチヤイ
チャするだけ

すばら先輩大好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿です！

山なし落ちなしのタイトル通りの小説です！

※この小説にはガールズラブの描写がたくさんあります。苦手な方はback推奨です。

ありさあやは大学生でルームシェアしてて付き合ってます。

作者は豆腐メンタルなので批評はあんまりしないでただけるとうれしいです。

感想評価待ってます!!

1
話

目次

1

1話

朝、私は有咲が起きる少し前に起きる。理由は簡単で可愛い可愛い恋人の寝顔を見るためだ。あまり朝が強くない有咲は私が起きたのに気付かずにくっすり寝ている。いつものようにきれいな金髪に軽くさわってみる。なんでこんなにつやつやしてるの？同じシャンプーとリンス使ってるのよね？と疑問に思うくらい有咲の髪はさわり心地がいい。

「う〜ん」

「有咲？」

返事がない。あぶないあぶない有咲を起こしちゃうとこだった。前にさわりすぎて有咲が起きたときなだめるのに苦労したのだ。寝てる間はするいだろ私の私だつて沙綾の髪さわりたいのにとか言つてた。後者は小声だったけど私の耳にしっかり聞こえていた。そのときの顔が本当に可愛くて素直じゃない有咲可愛いって言つたらまた拗ねちゃって大変だったのだ。その態度ですら可愛いと思う私はもう末期だろう。私は有咲が居なくなつたら生きていけるのだろうか。いやいやなんで朝からそんなこと考えててんの私。だめだなんか頭の中がよくわからない状態になってしまったので朝食

を作ろうと布団を出ようとした。

「あれ？」

いつの間にか有咲が私の手を握っていた。

「沙綾〜」

有咲のかわいい寝言が聞こえてきた。寝ながら手を握るなんてどんだけ私のこと好きなのと思ったがどう考えても私の有咲への思いの方が強いと分かっているのだから笑ってしまった。

「幸せだな〜私」

有咲から手を繋ぐことはほとんどないからとても嬉しかった。有咲が寝ていて無意識だとしても、いや無意識だからこそ嬉しいのかな。

有咲が起きたらこのことだからかかってあげよう。どんな反応するかな？顔を真っ赤にしながらい言いつてる姿が目には浮かぶ。

「起きてないしいいよね」

ちよつと我慢できなくなつた私は有咲の頬に軽くキスをして顔を赤くしていた。

そろそろ朝食を作らないとまずい時間なので名残惜しいが有咲の手をほどいてキッチンに向かう。朝からいいことがあつたから朝食は少し豪華にしようかな。

「有咲〜朝だよ〜起きて〜」

「お、おう」

「あれ？起きてたの珍しいね」

「まあたまにはな」

私が起こすか朝のスキンシップ（一方的）をやり過ぎるかのどちらかでしか起きないのに珍しく有咲が起きていた。顔を真っ赤にしていたが何故だろう？

「朝御飯できたから一緒に食べよう」

「そ、そうだな。今行くわ」

あれ？いよいよおかしい。いつもなら、いつもすまんな沙綾。それは言わない約束だよ有咲。なんてくだらないやり取りをするんだけど。もしかしてあのとき起きてた？だとしたら顔が真っ赤なこともつじつま合うし。

「有咲、いつ起きたの〜？」

「え〜？いやさつきだよさつき」

やや上ずった声でごまかそうとする有咲。なるほど、そういうことか。

「寝ぼけた振りして甘えてくるなんて有咲かわいい〜」

「違うっつーのー!!」

私の恋人は本当にかわいい。